

2026年7月16日 ろうきょうオンラインセミナー『誰かを支えながら自分も働く地域共生社会』

ケアリングコミュニティに向けて

慶應義塾大学大学院健康マネジメント研究科 教授

認知症未来共創ハブ リーダー／人とまちづくり研究所 代表理事

堀田聡子 (shm@sfc.keio.ac.jp)

各地の「住民主体の地域づくり」 の取り組みから見たこと

参考：堀田聡子（2025）「住民主体の共生型地域づくりとAAR連鎖運動」『作業療法ジャーナル』59（4）,370-374.

住民主体の共生型地域づくり及びその社会的価値の見える化と 地域マネジメントに関する研究

【目的】

- 地域共生社会の実現について、改正社会福祉法（平成29年）公布後3年を目途に市町村における取組みの全国普及をはかる方策を検討することとされ、個人に寄り添う包括的支援と地域づくりにかかわる取組みの見える化と持続可能性の担保が急務
- 保健福祉領域に関わる課題を手がかりに始まる地域づくりを、各種計画の総合化や官民協働での財政支援のもとに発展させるには、取組みとそれが地域社会にもたらす価値の可視化が不可欠にもかかわらず、特に地域づくりに係る事業で、社会的価値の捉え方、いまと未来の社会をつくる主体・活動の育み方が課題
- 地域共生社会が求められる背景の1つは「つながり」の再構築の必要性
- **伴走型支援・地域づくりとその循環に係る取組みの見える化と持続可能性の担保、地域マネジメントにおける活用について、「主体形成」と「つながり」に焦点をおき、具体的な提言を行うことを目的とする**

【方法】

- 「人と人とのつながりを再構築し、誰もが参加でき、多様な人々が支え合う
伴走型支援・地域づくりとその循環」を住民主体の共生型地域づくりとみなす
- 個別支援と地域づくりのそれぞれに焦点をおく国内13の活動・地域を分析対象として、学際的な研究者とコミュニティづくりや中間支援等に取り組む研究協力者によって各フィールドでおきていることを観察
 - 分析・記述
 - 評価の視点や項目を棚卸
 - 分析対象フィールドの関係者を含めて対話を繰り返す
 - ことによって、質的データを構造化（帰納的アプローチ）
- 並行して「主体形成」「つながり」について先行研究レビューから理論的に考察、介護保険・地域包括ケア、医療技術評価、交通経済学・都市経済学分野で評価対象となる施策、参加型評価、社会的インパクト評価において標準化された指標等から住民主体の共生型地域づくりの評価手法や指標づくりに参考になる部分を抽出

【メンバー】

研究代表者：堀田聰子

分担研究者（敬称略、所属・肩書は当時のもの）：

- ・ 垣田裕介（大阪市立大学生生活科学研究・准教授）
- ・ 後藤励（慶應義塾大学経営管理研究科・准教授）
- ・ 近藤尚己（京都大学大学院医学研究科・教授）
- ・ 孫大輔（鳥取大学医学部地域医療学講座・プロジェクト研究員）
- ・ 服部真治（医療経済研究機構研究部／研究総務部・主任研究員／次長）
- ・ 牧野篤（東京大学大学院教育学研究科・教授）
- ・ 室田信一（東京都立大学人文社会学部・准教授）

研究協力者（敬称略、所属・肩書は当時のもの）：

- ・ 青木佑・笥裕介・佐藤理恵（NPO法人イシュープラスデザイン）
- ・ 鴨崎貴泰（認定NPO法人日本ファンドレイジング協会）
- ・ 呉哲煥・米田佐知子（NPO法人CRファクトリー）
- ・ 土畠智幸・松井翔惟（医療法人稲生会）
- ・ 西村勇哉・浜田真弓（NPO法人ミラツク）
- ・ 野村佳織（株式会社NTTデータ経営研究所）
- ・ 前野隆司（慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科・教授）

以下の分析対象地域・活動に関わる皆さん

<個別支援から>

- ・ 北海道札幌市（JOIN／一般社団法人札幌一時生活支援協議会）
- ・ 宮城県登米市（労働者協同組合ワーカーズコープ・センター事業団 登米地域福祉事業所）
- ・ 愛知県名古屋市（一般社団法人草の根ささえあいプロジェクト）
- ・ 福岡県中間市（市民生活相談センター／NPO法人抱樸）

<地域づくりから>

- ・ 北海道札幌市（医療法人稲生会）
- ・ 神奈川県横浜市（認定NPO法人こまちぷらす）
- ・ 愛知県豊明市（地域包括ケアシステム構築に向けたまちづくりの取組み）
- ・ 滋賀県東近江市（公益財団法人東近江三方よし基金及び地域の活動）
- ・ 奈良県奈良市（追分地区の活動）
- ・ 兵庫県豊岡市（モバイル屋台を用いた健康カフェ活動YATAI CAFÉ）
- ・ 福岡県久留米市（インクルーシブなコミュニティに向けたプラットフォームと生み出された活動）
- ・ 岐阜県岐阜市（東京大学大学院教育学研究科社会教育学・生涯学習論研究室と2自治体の共同研究チームによる介入研究）
- ・ 長野県松本市（同上）

地域共生社会における「つながり」と「主体形成」 （室田信一先生）

つながり・主体形成に関連するキーワードについて先行研究（日本語・英語）をレビュー

【つながり】

- ソーシャルキャピタル
- ソーシャル・ネットワーク／ソーシャル・サポート・ネットワーク
(Whittaker・Garbarinoら1983、Barrera1980、Wu & Sheng2019)
- 社会的つながり (Lee & Robbins1995、Brownら2012、Lenziら2013)
- コミュニティ・ビルディング (Minkler2012、Fabricant & Fisher2002、Naparstek)

【主体形成】

- エージェンシー (Sen、Lister)
- 意識化 (Freire1970)
- リーダーシップ (Heifetz1994、Ganz2019)
- オーナーシップ (Lechapelle2008)
- 住民主体 (岡村1983、原田2014、柴田1998・2007)

- 1) 孤立しがちな個人が地域の中で資源に結びつき、その恩恵を受けること
- 2) 個人を支える地域の関係者がつながることで、資源のネットワークができること
- 3) 地域の結びつきが開かれたものとなり、より多くの人にとってアクセス可能なものになることが、つながりをつくることのプラス効果であると考えられる。

つながりには資源と個人を結びつけるというソーシャル・サポート・ネットワークのような考え方がある一方、社会的つながりのように青年期に地域住民とのつながりが豊富なことが、その個人の人格形成に影響を与え、市民性の獲得に寄与するという視点も。

コミュニティ・ビルディングの研究においても、ソーシャル・キャピタルの醸成によって個人がその利益を享受するというだけでなく、むしろ市民参加の促進やリーダーシップの養成、責任感の醸成というように、個人が社会につながる存在へと変容することを促進する側面に注目。**つながりを通した市民性の形成という観点は、「主体形成」と「つながり」という2つの概念を架橋するうえで有効。**

主体形成に注目することの意義は、一つには、地域における住民同士の支え合いが主体的に（自発的に）おこなわれることと、もう一つには、課題を抱えた当事者が主体的に自身の課題に向き合うことについて考察すること。どのキーワードも弱い個人が主体性を獲得する過程に注目。

主体形成の過程とは、課題を抱えた当事者が、自身の課題に向き合い、その向き合う過程を通して当事者としての覚悟が生みだされ、自身の周りの環境にはたらきかける行動に結びつくことが重要になる。

それは内発的なプロセスではあるが、一方で、「**社会的つながり**」における先行研究では、**青年期において地域住民との交流があることによって市民性が獲得される**という結論が示していたように、**地域とのつながりを通して内発的なプロセスが誘発される**ものと考えることができる。

「つながり」と「主体形成」は一見独立した概念と思われるが、**つながりの結果として主体性が育まれること、また主体形成はつながり作りの過程を通して促進されるという側面に注目すると、両者を一体的に捉えることが地域共生社会の構築に有効。**

帰納的アプローチによる評価モデル構築： 住民主体の共生型地域づくり普及支援ガイド（第一版）作成のプロセスと趣旨

【住民主体の共生型地域づくり普及支援ガイド（第一版）】

- 目的：自治体や事業者等が事業の成果やプロセスを振り返り、そこからの学びを更なる事業改善やよりよい実践に役立てること
- 概要：国内13の活動・地域で起きていることに基づく評価モデル（ここでは「**基本的なロジックモデル**」「**活動のポイント（コツ）**」と「評価指標と測定方法（試案・例）」で構成されるもの）を3ステップで紹介
ケーススタディと活動のポイント（コツ）の具体例とあわせてとりまとめたもの
 1. 目指すべき事業成果とそこに至る道筋を確認しよう
 2. 達成するための道筋に沿って実際に取り組んでみよう
 3. データをもとに活動の実施状況や成果を振り返ってみよう

【評価モデル作成の手順】

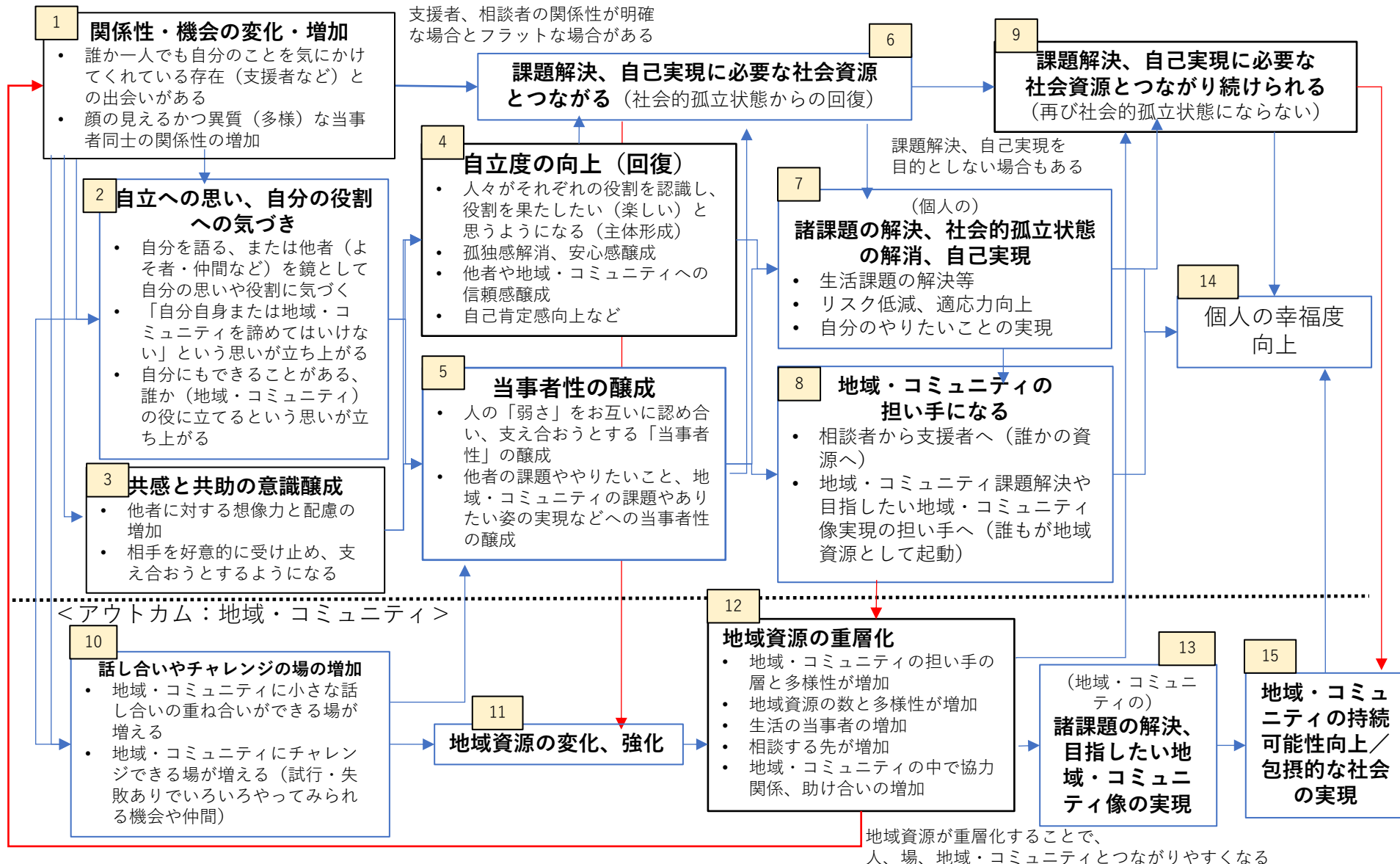
- ① 13地域・活動の観察に基づく分析、記述と評価の視点や項目の棚卸
→何が起きていたか、個が動き始めるきっかけ・要因、個から面へ／面同士のつながりのきっかけ・要因、地域のアウトカム、地域に起こったインパクトを記述
→ドナベティアンモデルを採用して評価の視点や項目を棚卸
- ② ひとまず個別支援（課題解決重視型、地域資源の重層化重視型、主体形成重視型）と地域づくりの2類型で標準的評価モデルを作成
- ③ 各地域・活動における個別評価モデルの検討
- ④ 個別評価モデルを統合した評価モデル案の検討
（個別支援3種の統合、個別支援・地域づくりの統合）
- ⑤ フィールドにおける統合評価モデルを巡る対話と検証
「つながり」と「主体形成」に関する先行研究等に立ち返り演繹的説明

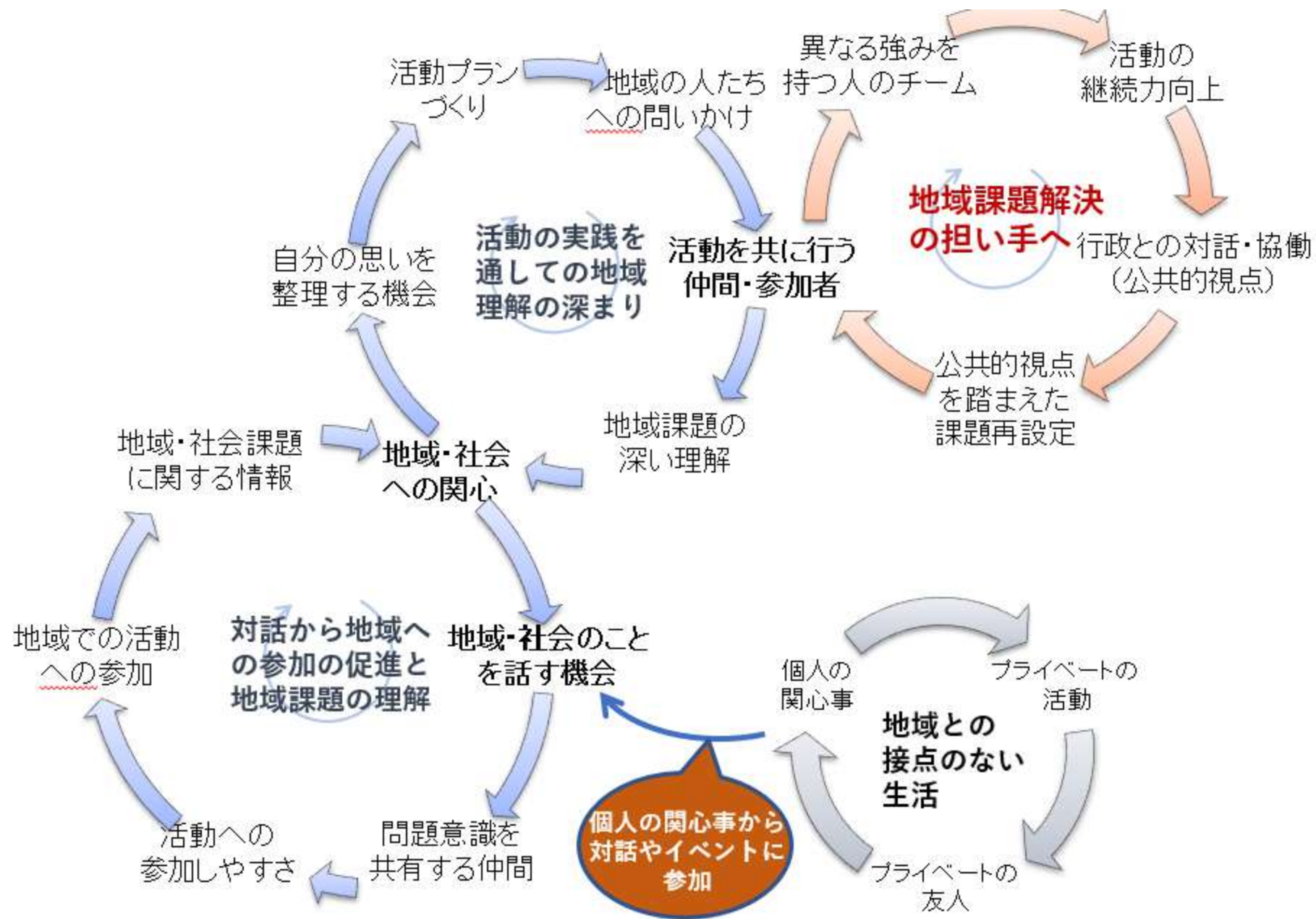
図表5 基本的なロジックモデル活用のポイントと注意点

ポイント	- 社会的孤立状態で生活課題を抱える個人の課題解決や自己実現に対する支援・活動の個別ケースの振り返り、検討に活用することができます。 - 課題を抱えた個人に対する支援や地域づくり等、みなさんの活動全体の振り返り、検討に活用することができます。 - 複数の関係者と、活動の目指すべき方向性や協働のポイントや役割分担について対話や議論を促すための、コミュニケーションツールとして活用することができます。
注意点	- 基本的なロジックモデルに記載されているすべてのアウトカム項目の達成を目指す必要はありません。また、1つの活動、団体で取り組む必要もなく、他の団体や行政などと協働、役割分担をしながら設定したアウトカムの達成を目指す活用もできます。 - ロジックモデルで構造化されている成果達成への道筋は仮説であり、固定されているものではありません。実際には矢印通りに変化が起こらないケースや、変化の起こる順番が変わったり、変化の間を行ったり来たりするケースもあります。それらの制約をよく理解した上で、活動の振り返りや評価の結果をもとに、成果を生み出す道筋の改善をし、精度を上げていくことが必要です。

住民主体の共生型地域づくりにかかわる基本的なロジックモデル

<アウトカム：個人（相談者・住民）>





活動のポイント（コツ）リスト：個別支援に特徴的なもの

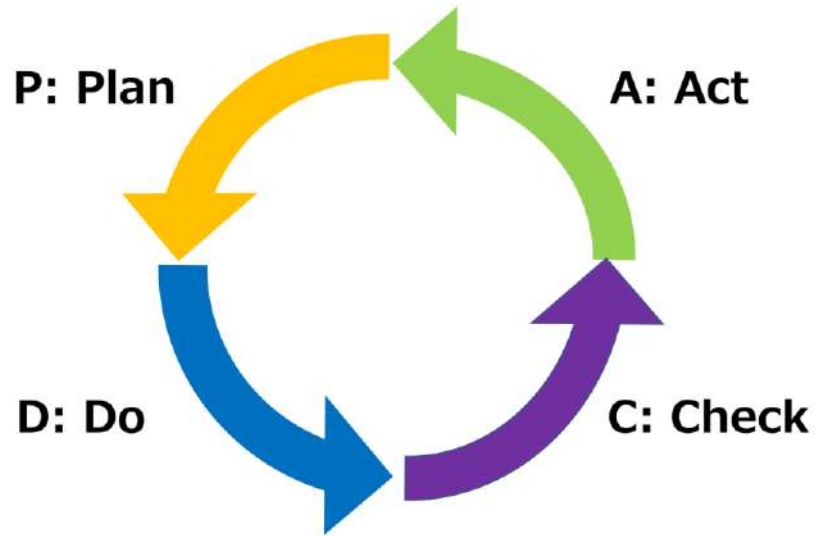
個別支援に特徴的なポイント（K）：ストラクチャ（S）、プロセス（P）

No	活動のポイント（コツ）
<ストラクチャ（S）>	
KS-1	ワンストップの相談窓口がある
KS-2	衣食住を提供するシェルターがある
KS-3	シェルター退所後に食事や居場所、食事会ボランティアの役割等を提供するスペースがある
KS-4	多機関（行政含む）もしくは地域資源と連携した支援体制がある
KS-5	支援者と相談者の関係性が明確な場合とフラットな場合がある（目的によって異なる）
KS-6	誰も排除せず、活躍できる場がある
KS-7	支援者・コーディネーターたちに対して手厚い研修と日々の情報共有を通じた理念と価値観の共有
<プロセス（P）>	
KP-1	地域資源開拓、開発を行っている（支援のため＋セーフティネット構築のため）
KP-2	アウトリーチを実施している、支援拒否ケースも地道に継続している
KP-3	相談者の変化をじっくり待つ（支援へ移行する期間や主体形成期間）。生きる意欲、働きがい、地域・コミュニティでの安心感の獲得。課題や困り感の自覚、放置や受け身から脱却
KP-4	アフターフォローを行う（支援機関 and 地域包括支援センター or 行政）
KP-5	行政から支援困難事例等の照会を受けている（断らない）
KP-6	多面的に相談者をつながる（住居、仕事、家計、医療、子育て、居場所）
KP-7	「当事者主体」の仕事おこしを支援者・地域・コミュニティの協力者と共に取り組む
KP-8	相談者の課題解決が必ずしも目的ではなく、地域・コミュニティとつながり、新たな担い手になることを重視した支援や様々な人をつながるなかで、本人の心身の回復と主体形成を重視した支援等目的に応じた支援を行う
KP-9	AAR循環*がある
KP-10	相談者と支援者が一緒に活動する（困りごと、仕事探しなど）
KP-11	相談者の自由意志を尊重しながら見守るスタンスがある
KP-12	「趣味」「好きなこと」を重要視。そこから意欲や行動が湧いてくるので、それにつながるサポートを積極的に行う
KP-13	同じ境遇・立場の仲間とつなぐ
KP-14	相談者のまわりにネットワークを築くようにさまざまなつながりを展開する
KP-15	家族へのカウンセリングや支援も行う
KP-16	本人の力を信じる、その人がそもそも持っている人間としての力を信じている

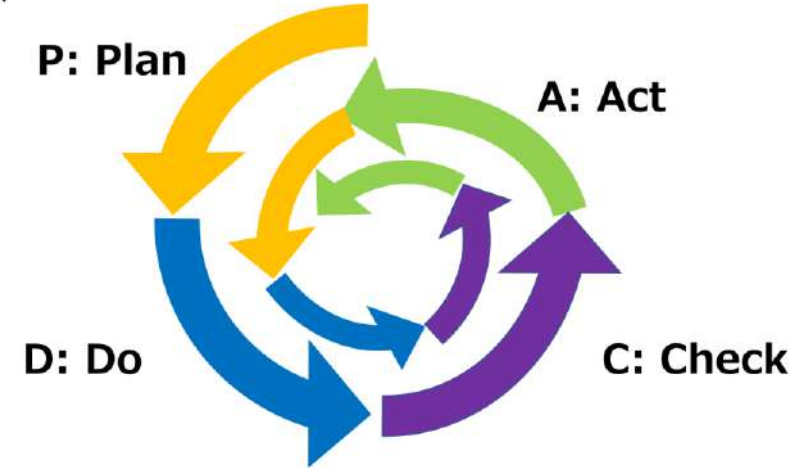
活動のポイント（コツ） リスト：地域づくりに特徴的なもの

地域づくり（C）に特徴的なポイント：ストラクチャ（S）、プロセス（P）	
No	活動のポイント（コツ）
<ストラクチャ（S）>	
CS-1	顔の見えるかつ異質（多様）な当事者同士の関係性がある（例：多様な年代（こども、若者、お年寄り）・地域・コミュニティ（地元住民、よそ者）・属性（障がいの有無等）などを越えた参加者の固定化されていない関係性、役所、専門職、企業、農家、学校、福祉施設など多様な主体の参加がある
CS-2	多様なつながりの深さと場面の選択肢、聴く・語る（自分の言葉によって自分の思いに気づく）／対話する／認め合う機会がある くつながり方のパターン>①なんらか課題意識や目標をもって企画・仕掛けへ参加②自分のやりたいことができるかも（自分の課題意識と同じかも）と思って参加③とにかく誘われて参加④たまたまきてみた（カフェ等のゆるい場）
CS-3	心理的な安全を感じ通える場がある（何でもいえる、否定されない、失敗しても大丈夫、相互承認）
CS-4	地域・コミュニティにチャレンジできる場がある（試行・失敗ありでいろいろやってみられる機会や仲間）
CS-5	支援者と相談者の関係性が明確な場合とフラットな場合（場合によっては相談者が上）がある（例：地域・コミュニティのお年寄りと地域外から来た若者・学生等）
CS-6	人や組織をつなぎ、共通の思いを育む触媒役の存在がある（コーディネーターの存在と力量）
CS-7	構造化・言語化を支援する外部の第三者の存在がある
CS-8	全ての施策のハブとなるカフェのような場の存在がある（敷居が低い・離れても戻れる場）
CS-9	理念やビジョンの言語化、共有が団体内、コミュニティ内でなされている
CS-10	市民の力を引き出す行政のコミュニティ施策がある
CS-11	資金面での支援の仕組みがある
CS-12	風土、地域・コミュニティのもつDNA、地域・コミュニティ古来の資源がある（文化芸術含む）（例：転入者が多く新しいものを受け入れる地域・コミュニティ風土、市民・当事者が活動して課題解決してきた歴史等）
<プロセス（S）>	
CP-1	顔の見えるかつ異質（多様）な当事者同士の関係性を増やす
CP-2	多様なつながりの深さと場面の選択肢、聴く・語る（自分の言葉によって自分の思いに気づく）／対話する／認め合う機会をつくる
CP-3	仕組・施策のバリエーションが多い（多様な主体状況に合わせた関わり方、入り口がある） く主体状況のパターン>①なんらか課題意識や目標をもって企画・仕掛ける主体②自分のやりたいことができるかも（自分の課題意識と同じかも）と思って参加する主体③とにかく誘われたから参加する主体④たまたまきてみた主体（カフェ等のゆるい場）
CP-4	心理的な安全を確保する場をつくる（何でも言える、否定されない、失敗しても大丈夫、相互承認）
CP-5	地域・コミュニティにチャレンジできる場をつくる（試行・失敗ありでいろいろやってみられる機会や仲間）
CP-6	心理的安全な場やチャレンジできる場の持続可能性を担保する工夫をしている
CP-7	生活の中で自然に地域参加できる工夫がある（生活導線にあるお店や働く場所で困りごとの相談等ができる工夫）
CP-8	足し算の支援（こつこつ積み上げる、時間がかかる（素人が寄り添い支援））と掛け算の支援（専門家が一気に進める支援）が両方ある
CP-9	課題解決や自己実現を拙速に目指さず（PDCAにすぐ入らない）、一人ひとりの自立度の向上（回復）や当事者性の醸成をじっくり行う。その過程では、足踏み・後戻りを受け入れる（足し算の支援）
CP-10	地域づくりに外から介入する場合（よそ者として）、地域住民との信頼関係を築くために関わる側の構え（作法）を理解して行動する。具体的には、地域のことは何も知らない前提で、地域の人に教えてもらうスタンスで入る。地域の人のお話を余計な解釈をせず、素直に聞く、受け入れる、驚く、質問することを繰り返す。
CP-11	ワークショップを活用しながらカウンセリング（自分の思いや役割への気づきを促す）の場や実践的なAAR*の場へ移行させる仕掛けがある
CP-12	楽しいこと・面白いことから興味関心が湧き、行動する仕掛けがある（AAR循環が発生する仕掛け）
CP-13	AARの継続的な循環運動がある＝学びのプロセス
CP-14	各々が取り組みたいことに関して周囲を巻き込みながら、地域・コミュニティの資源（文化、資源、人）と場を生かして実現させるための仕掛けや関係性をつくる
CP-15	目指したい地域・コミュニティ像に対する思いを醸成する機会・場がある（例：地域・コミュニティの資源（文化、資源、人）を活かし、誰もが集える場所にしたいという思いの醸成など）
CP-16	地域づくりの方法や地域資源には常に整っていない余白があり、地域・コミュニティに進化欲がある状態を維持している
CP-17	マニュアルで統一化・量産化しない

PDCAサイクルからAAR循環運動へ (牧野篤先生)



実際は・・・



予期する・予測する＝
何か「楽しいこと・嬉しい
こと」を考えてウキウキする

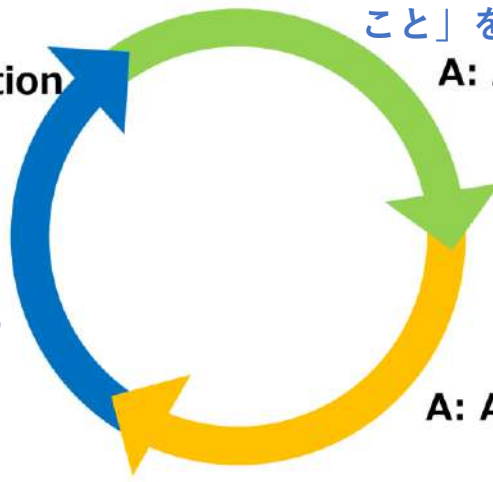
R: Reflection

A: Anticipation

AAR循環をとらえる

A: Action やってみる

振り返る＝
評価しない
振り返って
さらにAnticipation
どんどん多様になる



実際は

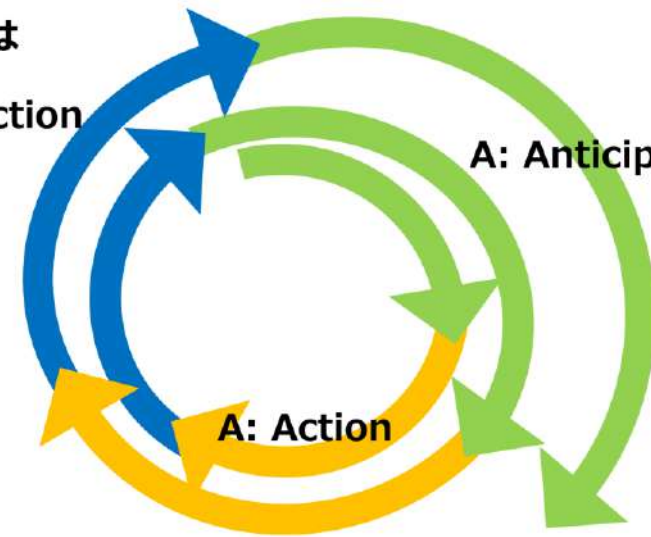
R: Reflection

A: Anticipation

A: Action

楽しさ・愉しさに
駆動される試行錯誤

開放系の構造



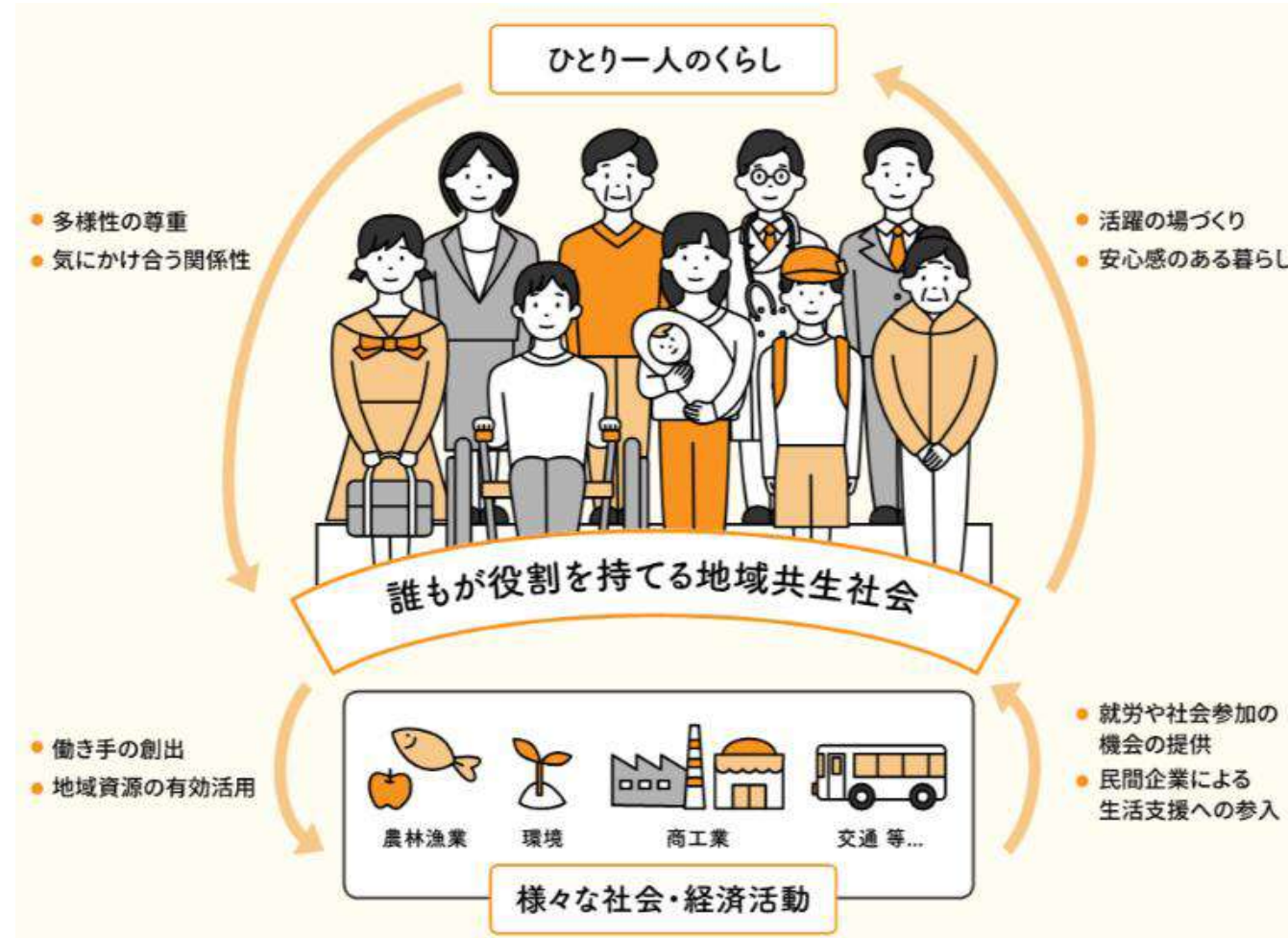
ケアリングコミュニティに向けて
「共生」をもたらす土台

「地域共生社会」の実現に向けて

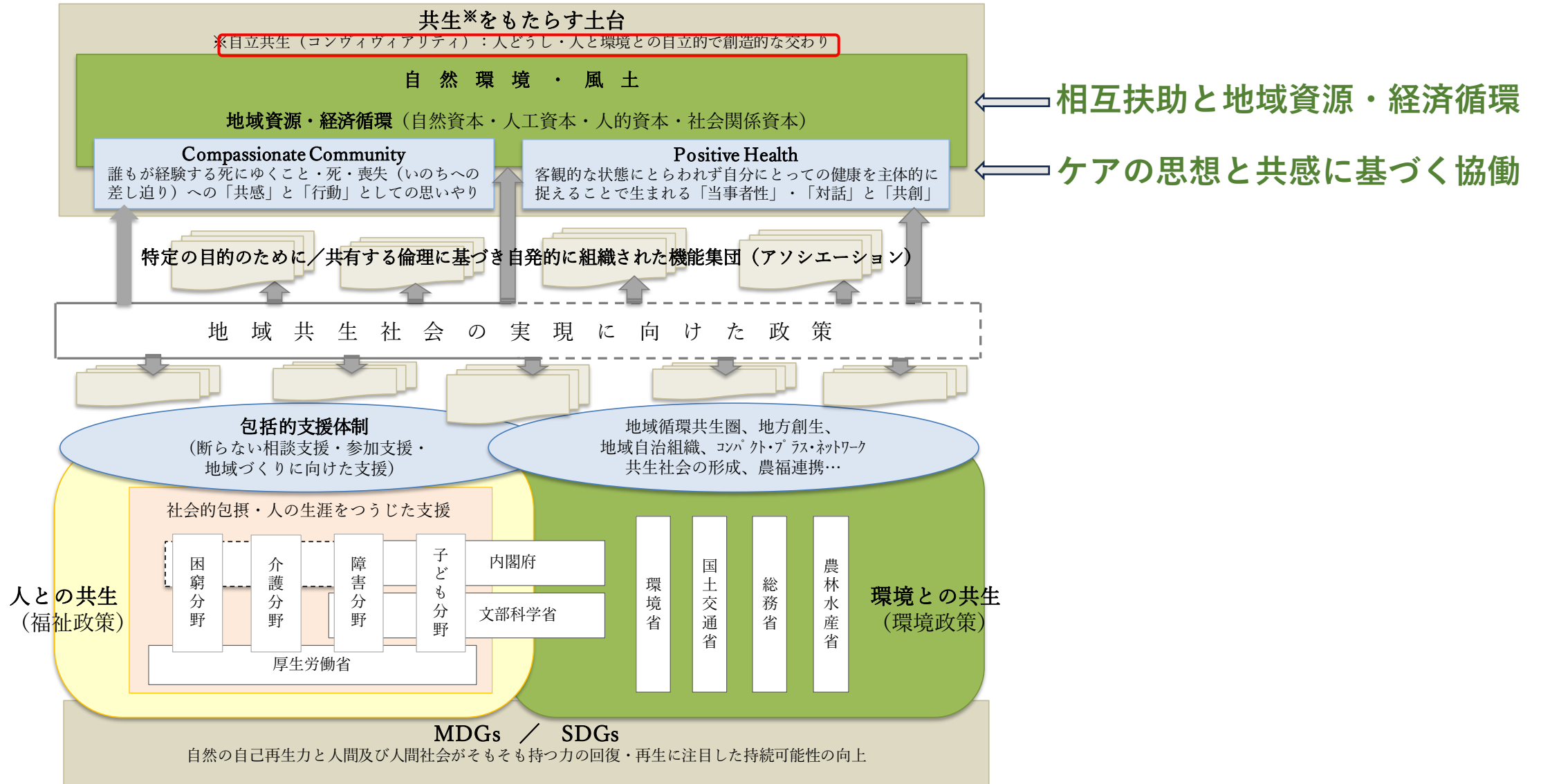
共に生き、相互に支え合うことのできる地域（Care by Community:ケアリングコミュニティ）

- ①ケアの当事者性 ②地域自立生活支援 ③参加・協働
④共生社会のケア制度・政策 ⑤地域経営

（原田 2014）



共生をもたらす土台



支援観の変化と環境政策の変遷



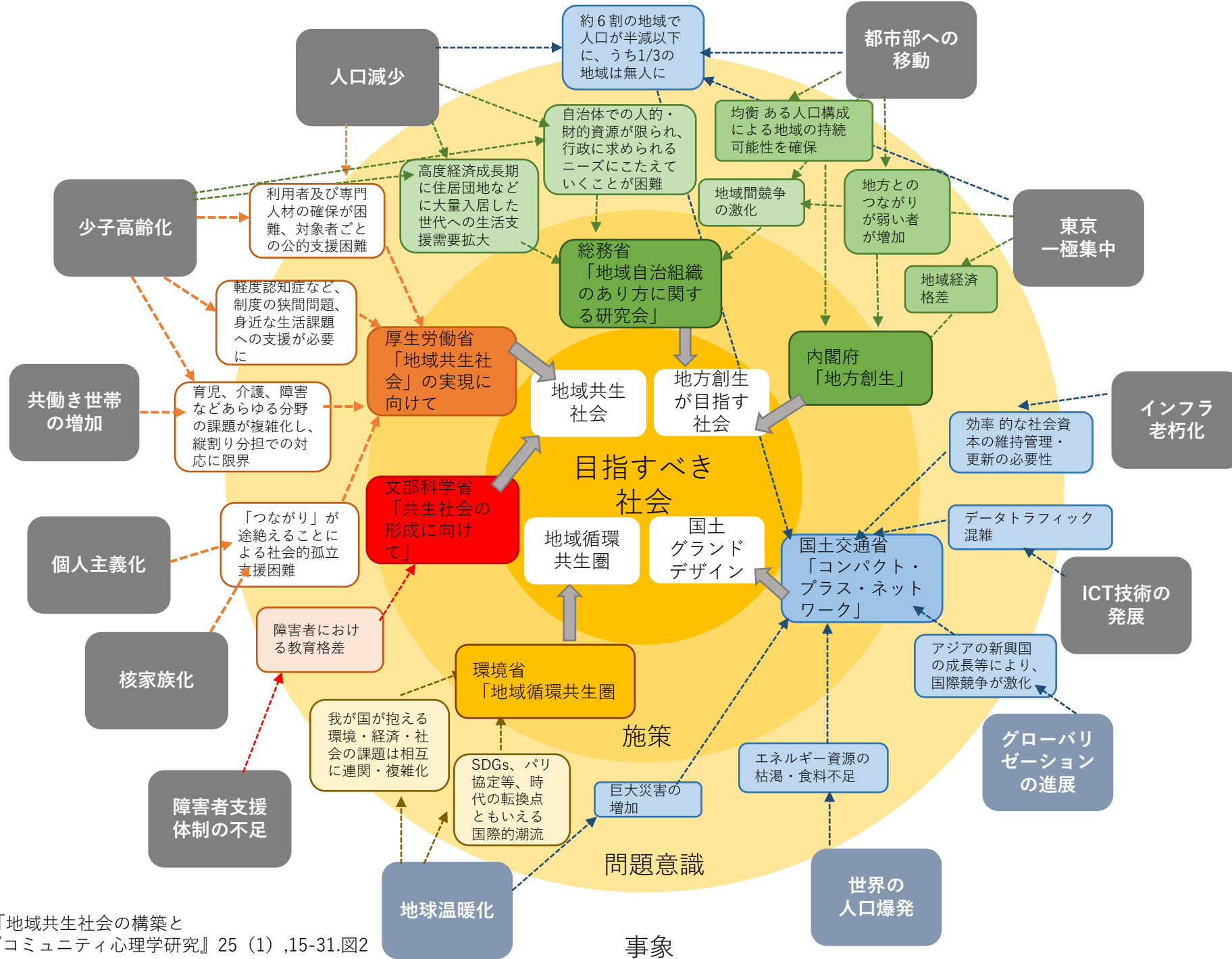
2015年 国連総会「持続可能な開発のための2030アジェンダ」決議

出所：堀田聡子（2021）「地域共生社会の構築とコンヴィヴィアリティ」『コミュニティ心理学研究』25（1）,15-31.図1

森川美絵「保健医療（ヘルスケア）及び福祉介護（ソーシャルケア）における支援観の国際的動向」厚生労働科学研究費補助金（政策科学総合研究事業（政策科学推進研究事業））¹⁷

「保健医療福祉資格に共通して求められるコンピテンシーの検証と教育カリキュラムの構築に関する研究（研究代表者 堀田聡子）」平成30年度報告がもとなっている。

資料：国際的な支援観の動向については、



コンパッション都市・コミュニティ

- （健康都市における社会生態学アプローチを受け継ぎながら）
健康都市の枠組みに「**死、死にゆくこと、喪失の経験**」が除外されている
ことを批判
- パブリックヘルスの政策と実践にエンドオブライフケアの諸課題を包摂し、
コミュニティ形成により生老病死にかかわる相互的なケアの回復をはかる
ことを提唱
- その要として、**他者の苦悩や苦しみに突き動かされる柔らかな人間的応答**
としての「コンパッション」の働きを据える

健康の新しい概念 (M Huber et al, 2011, 2016他)

<https://www.bmj.com/content/343/bmj.d4163>

<https://www.ncbi.nlm.nih.gov/pmc/articles/PMC4716212/>

「社会的・身体的・感情的問題に直面したときに適応し、 本人主導で管理する能力としての健康 (Positive Health)」

- 身体の状態：元気、体調、症状・痛み、睡眠、食事、コンディション、動き
- 心の状態：記憶力、集中力、意思疎通力、朗らか、自己受容、変化への対応力、管理感
- 生きがい：生きがいのある生活、生きる意欲、理想を達成する意欲、信頼できる、
受容力、感謝の心、生涯学習
- 暮らしの質：楽しめる、幸福感、しっくり感、バランス感、安心感、住まい、
十分な生活費
- 社会とのつながり：他者との接触、尊重してもらえる、楽しみを共有できる仲間、
他者からの支援、居場所がある、やりがいのある活動、社会に対する関心
- 日常の機能：身の回りのことができる、自分の限界を知る、健康についての知識、
時間管理力、金銭管理能力、働ける、支援を求めることができる



私の ポジティブヘルス



BODILY FUNCTIONS 身体の状態

- 元気のよさ
- 調子のよさ
- 症状や痛みがない
- 睡眠の度合い
- よく食べている
- 性のあり方に満足している
- 身体の回復が速い
- 身体の軽やかさ



DAILY FUNCTIONING 日常機能

- 身の回りのことができる
- 自分の限界を知っている
- 健康を保つ仕組みがわかる
- 時間管理
- 金銭管理
- 働ける/社会活動ができる
- 公的援助・公的支援を要請できる



PARTICIPATION 社会とのつながり

- 他者とのつながり
- 親身してくれる人がいる
- 楽しみを共有できる仲間
- 必要なときに助けてくれる人がいる
- 居場所がある
- やりがいある活動・仕事
- 社会に対する関心



QUALITY OF LIFE くらしの質

- 生活を楽しめる
- 幸福感
- しっくり感
- バランスのある生活
- 安心感
- 居心地がよい
- 住まいと同居者への満足
- 生活費のやりくりができています



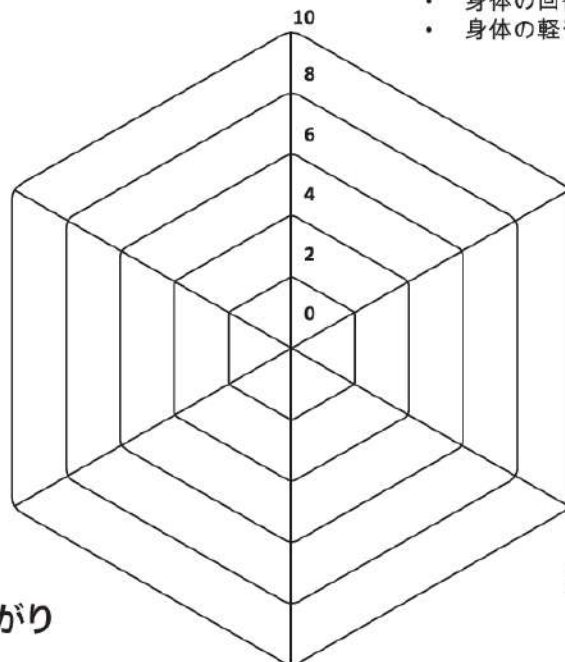
MENTAL WELL-BEING 心の状態

- 物事をはっきりと記憶できる
- 物事によく集中できる
- コミュニケーション力
- 気持ちの朗らかである
- 自分自身を受け入れられる
- 臨機応変に対処できる
- セルフコントロールができる



MEANINGFULNESS いきがい

- 生活にいきがいがある
- 日々やる気や意欲を感じる
- 達成したい理想
- 自己肯定感
- 人生の満足感
- 感謝の念
- 生涯学習
- ありのままに生活を受け入れている



上記以外で私にとって大切なことは: _____

おわりに

－ 個人とコミュニティの応答性を高める
労働者協同組合への期待 －

95%ルール

問題1：個人がケアを受け取る・ケアを提供する過程においてオーナーシップが奪われている

近代社会における知識・技能の高度化につれ、ケアの医療化（medicalization）と専門職化（professionalization）が進み、

さらに専門職ケアの提供を保障する仕組み（制度）の整備とともに、人々は死や喪失のケアといえは直ちに専門職ケアを思い浮かべるようになる。コミュニティに価値ある資源・キャパシティが備わっているにもかかわらず、それを認識できず、まして活用できなくなっている（Kellehear 2005他）

→**市民は自身の問題に対するオーナーシップ（≡主体性）を手放している**

専門職も無自覚にオーナーシップを奪っている可能性がある

問題2：ケアが提供される場において、 関係機関が当事者と協働できていない。

地域での健康課題や社会環境リスクに対して市町村行政がその中核的な役割を担うことが期待され（筒井 2006），地域共生社会の実現に向けても同様であるが，現場ではその機能が十分に果たされていない。

データ活用や連携のための具体的な方法が不足しており，日常業務に追われがちな行政職員の支援体制が不十分であるという課題も指摘されている（Lawn 2008）。

→ **当事者の課題やニーズを整理し，対話を通して，
当事者との協働による地域マネジメントがなされていない**

問題3：先進事例は「ニッチ」に留まり， 社会技術的なトランジションに至っていない。

ミクロレベルでは，相互的なケア関係（ケアリング）を支える活動・事業体や拠点，暮らしの場にかかわる多主体の協働を促し，その基盤をつくる自治体等が生まれてきているものの，

イノベーションをサポートするネットワークや学習プロセスの場の欠如から，
これらは「ニッチ」に留まり，社会技術的なトランジション（Geels 2005）には
至っていない。

実装の鍵はコミュニティ形成（community development）

Community Work

患者や家族に対して提供するサービス

Community Engagement

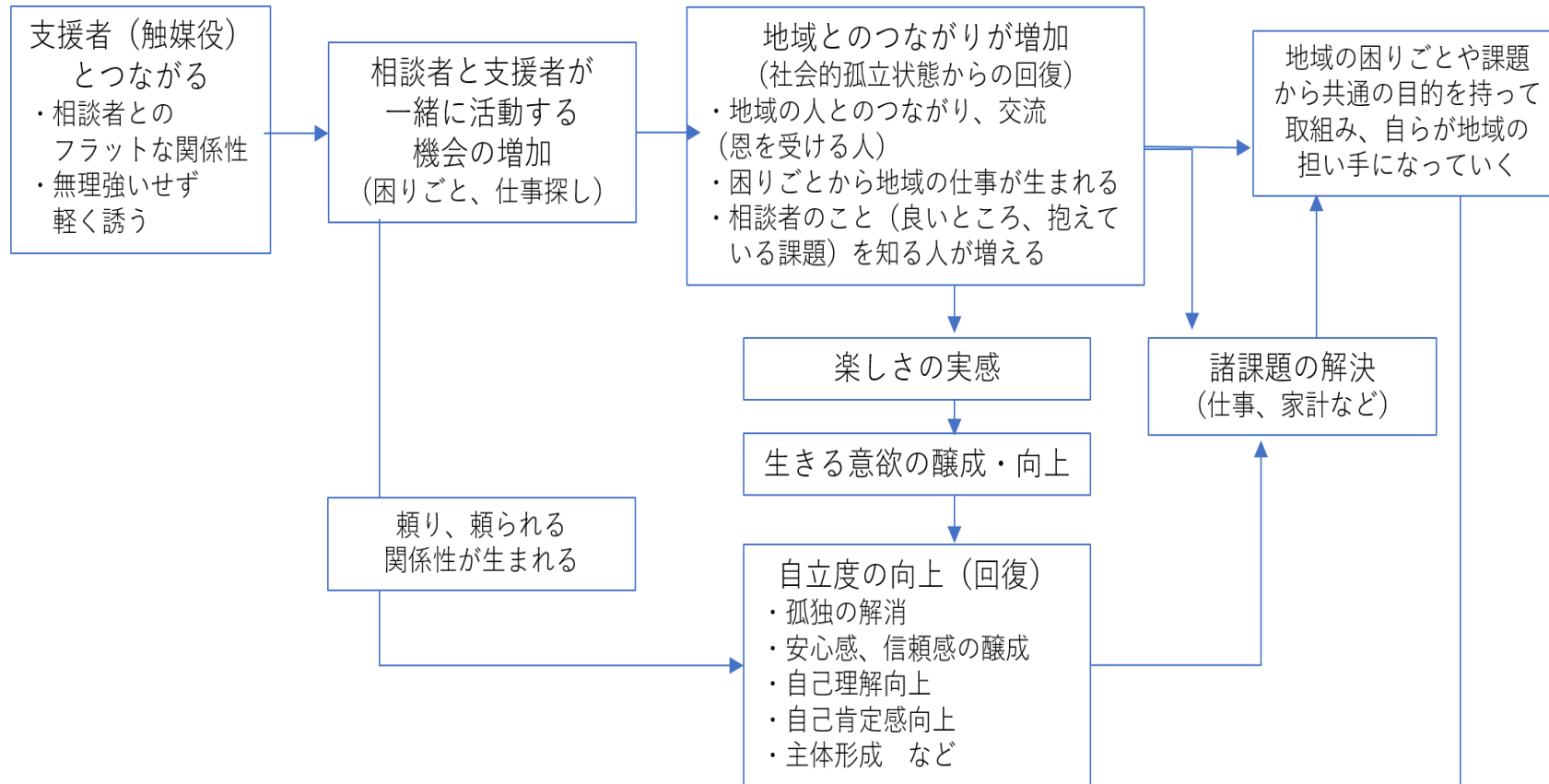
自分たちのケアワークのパートナーや参加者としてコミュニティを巻き込む

Community Development (Community Organizing)

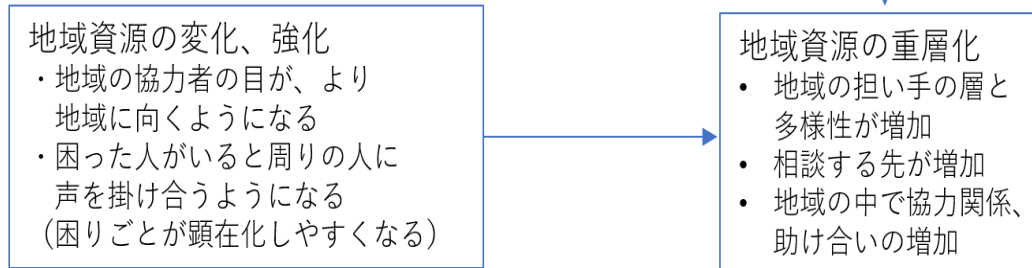
コミュニティのさまざまなセクターが、重篤な病と共に生きる人やその家族、さらにより広く（いずれそうなるかもしれない）コミュニティを支援することに直接貢献する

ストラクチャ	プロセス
・ 地域資源と連携した支援体制 ・ 支援者と相談者のフラットな関係性 ・ 誰も排除せず、活躍できる場がある	・ 「当事者主体」の仕事おこしを、支援者・地域の協力者と共に取り組む ・ 地域住民の願いややりたいことと仕事おこしが重なる ・ 相談者と支援者が一緒に活動する（困りごと、仕事探しなど） ・ 日頃の関わりを積み重ね、関係性を築いていく／ともに汗を流すことで信頼関係を深める ・ 相談者の課題解決を必ずしも目的とせず、地域とつながり、新たな担い手になることを重視した支援 ・ 地域資源開拓を行っている（相談先を増やすための見極め、協力者探し） ・ AAR循環がある

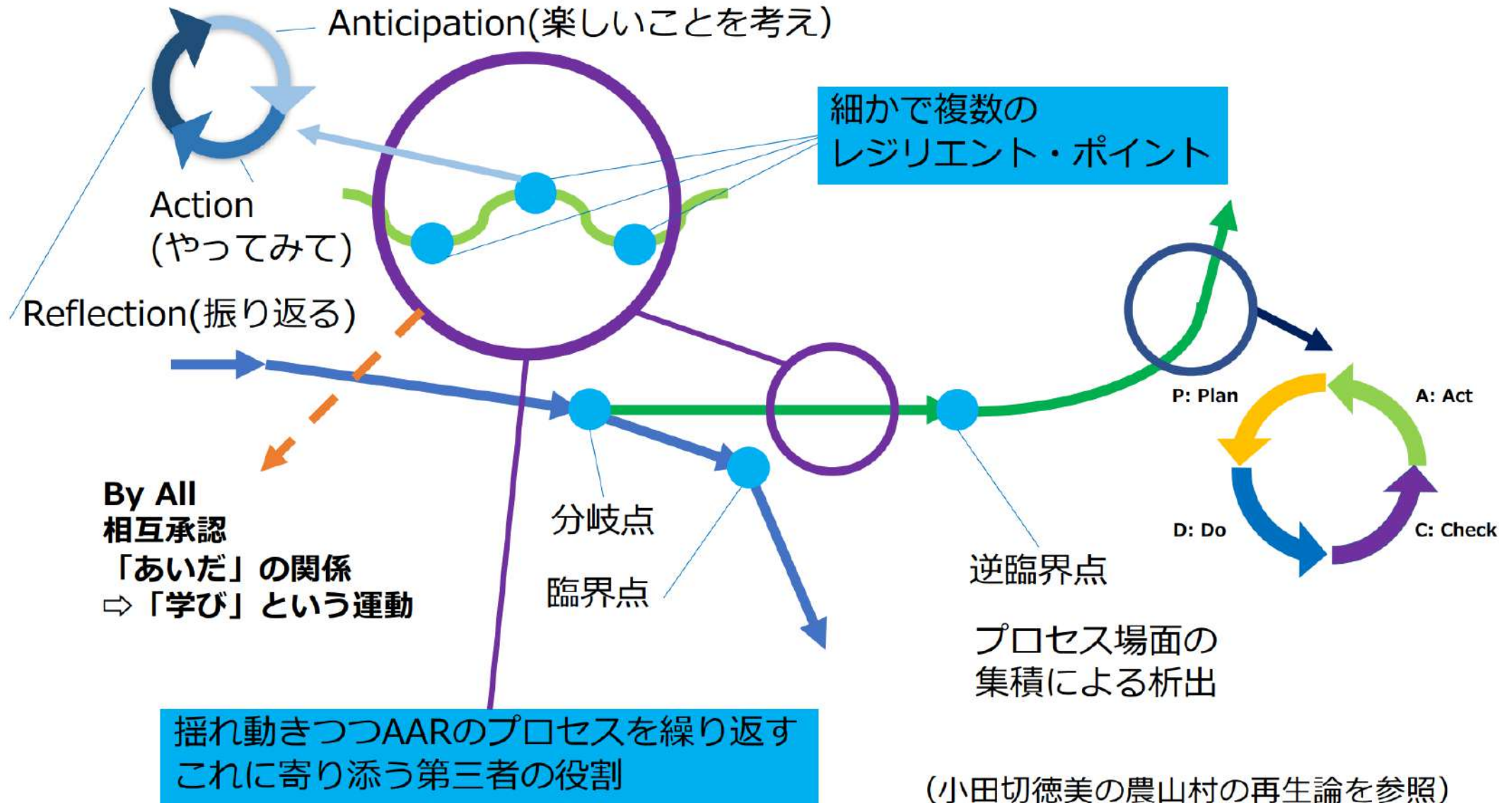
<アウトカム（相談者）>



<アウトカム（地域）>



レジリエントポイント内部のAAR循環運動 (牧野篤先生)



(小田切徳美の農山村の再生論を参照)